

第5日

平成22年3月5日（金）

午前10時零分開議

○議長（柴田裕隆君） これより本日の会議を開きます。

なお、本日の出席議員は20名で、会議は成立いたします。

本日の議事日程については、お手元に配付のとおりであります。御了承願います。

日程に従い、4日に引き続き、一般質問を行います。

それでは、最初に1番中島秀樹議員の質問を許可します。1番中島秀樹議員。

（1番中島秀樹君登壇）

○1番（中島秀樹君） 皆様、おはようございます。1番議員の中島でございます。どうぞよろしく願いいたします。

自分の力で朝倉の未来を変える、日本の未来を変える、そのようなことができる、あなたはにわかに信じられますか。ほとんどの人が信じられないと答えるはずですが。しかし、世の中のさまざまなことは、実は意外なほど少数の人たちの意思によって動いているのです。しかも、その少数の人が権力者とは限りません。実は、どこにでもいる、皆さんのような普通の人だったりします。そんな普通の人が強意思を持って行動するとどうなるのでしょうか。1人の行動が新しい別の人の行動を呼び、大きなうねりとなって、気がついたら、さまざまなことが変わっていたということが、往々にしてあるのです。

ペイ・フォワードという映画をごらんになったことがありますか。この映画は、11歳の少年トレバーが始めた、世の中をよくするための運動が大きな善意となって広がっていくというストーリーです。同じように、あなたの一つの行動が、意外な反響を呼び、それが町を、社会を、そして国家を変えていきます。

チェンジ・メーカーという言葉聞いたことがありますか。ふるさとをよりよい方向に変えるため、日本をよりよい方向に変えるためには、チェンジ・メーカーと言われる変革者の存在が必要ですが、私たち1人1人、だれもがチェンジ・メーカーになり得る資質を持っています。大切なのは世の中をよくしたいという強い思いを粘り強く持ち続けることです。周りからの協力者が得られない中で、1人で強い思いを持ち続けることは非常に難しいかもしれません。けれども、チェンジの先、すなわちどのような未来に朝倉を、日本を変えたいかという明確なビジョンや将来像があれば、人は孤独な思いにも耐えることができます。重要なことは、住みたい社会、暮らしたい未来を鮮やかに思い描き、それが今とどのように違っていて、何がギャップで、障害は何であるかを理解することです。

今、読み上げましたのは、先日私が読みました本、経済評論家の勝間和代さんのチェンジ・メーカーという文章の一節を、朝倉市のほうに当てはめて、ちょっとアレンジして読ませていただきました。

私は、これから朝倉市がどうあるべきかということ、市長は長い間、10年間一生懸命朝倉市のためにやっていたいて、御尽力いただいたというのはわかっていますが、最後に市長がどういった朝倉市を思い描いていたのか、また、今まだ思い描いているのかを、きょう聞いてみたいと思います。そして、それを鮮やかに描いて、市民の皆さんに共通の思いを持っていただけたらというふうに、そういった思いで、きょう質問を組み立ててまいりました。どうぞよろしく願いいたします。

続きは質問席から質問させていただきます。

(1番中島秀樹君降壇)

○議長(柴田裕隆君) 1番中島秀樹議員。

○1番(中島秀樹君) では、通告書に従い、質問させていただきます。

まず、私は、人間は満足した時点で成長がとまるというふうに考えております。今あるものだけを守り続けていても、そこに成長や発展はないというふうに考えております。組織が何を実現するために存在するのか、その原点が重要だというふうに考えております。非常に漠然とした質問ですけれども、市役所という組織は何を実現するために存在するのか、その思い、もしくは考えをお聞かせいただきたいと思います。

○議長(柴田裕隆君) 企画政策課長。

○企画政策課長(藤本具彦君) 議員御質問の市役所という組織は何を実現するために存在するかということにつきまして、事務者レベルとしての基本的な考えを、まず述べさせていただきますと思います。

地方自治法によりますと、地方公共団体は住民の福祉増進を図ることを基本として、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとございます。市では、合併後、平成20年3月に第1次朝倉市総合計画を策定いたしまして、その中で市の将来像といたしまして、水を育み街を潤す健康文化都市の創造、それから、共生と交流をつくる自立と責任のまちを掲げ、この将来像に向って総合計画を実現することによりまして、住民の皆様方の福祉の増進を図っていくことを基本としまして、これらが市民の皆様方の負託にこたえる市役所の存在意義かというふうに考えているところでございます。

また、地方分権時代の中、自己決定、自己責任の行政経営が求められている中におきまして、現在の自治体を取り巻く社会情勢はとてつもないものがございます。急速な高齢化、経済の急激な悪化、変化のスピードが加速してきてい

るといような、このような諸状況を踏まえまして、そのような中で、迅速かつ的確に対応していくことが求められておるところでございます。

朝倉市が大きな変化と変革の流れの中で、市民の暮らしを支え、町の活力を維持していくためには、行政体制の変革と、国の事業仕分けではございませんけれども、事業評価制度によります行政施策、事業のより一層の重点化、優先化を図りまして、真に必要な施策に行政資源を投入していくといった大胆な取り組みの考え方、発想も、また求められているというふうに思っているところでございます。

そのためには、市民の皆様との協働によりまして、パートナーシップ等によまして、住民の皆様方の福祉の増進、朝倉市の将来像実現に向って、より協力的に、弾力的に取り組みを進めていかなければならないというふうに考えているところでございます。

簡単でございますが、以上でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番中島秀樹議員。

○1番（中島秀樹君） 今、市民との協働という言葉が出ました。それから、水を育み街を潤す健康文化都市の創造という言葉が出ました。これは朝倉市のスローガンといいますか、基本構想なんですけれども、これが果たしてどれだけ市民の皆さんに浸透しているのかというのを、私は疑問だというふうに思っております。やはり、もう少し協働という言葉を使うのであれば、市民の方に働きかける、そういったことが必要ではないかなというふうに思っております。

市役所というのが、社会にとって本当に意義がある存在であるのか、必要とされている組織であるのかというのを、もう一度考えるべきではないかというふうに考えております。やはり、これだけいろいろな意見、多様化が進んだ中で、全体の合意というのがなかなかできないような時代で、市役所というのは、そういった意味では、リーダーシップをとる、旗振り役になり得る存在だというふうに思っておりますので、私は、もっと朝倉市はこういう方向に向うんだよと、水を育み街を潤す健康文化都市の創造だということであれば、もう少しアピールをすべきじゃないかというふうに思ってますが、アピールのほうは十分だとお考えでしょうか、お尋ねします。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

市長（塚本勝人君） 一番痛いところを突かれたように思っております。なぜかなれば、臼杵市の市長、後藤市長という有名な市長がおられます。彼は、レベルが違うんですけれども、民間の薬品会社の社長でございまして、しかし、県会議員もしてございました。学校は京都大学であります。私も何回か、先輩として教えを請いに行ったことがあります。

市報じゃないけれども、市報みたいなやつが、あそこはありまして、そこに毎回毎回寄稿してございますね。それで、自分の考え方を一つ一つ出してあります。それを集大成にしたものを持ってございますけれども、非常にいいことを書いてある。例えば予算は余産なりと。予算というのは予算の予を書きまして、こっちの余産は、余った、産業の産でございましてけれども、そういうふうなことも小論文で書いてございますが、そういう市長のリーダーシップを明確に、10年間、その席におったならば、自分がアピールしていったならば、もっといい結果が出たんじゃないかなというふうに、今反省しているところでございますが、浅学非才でございまして、なかなか思うとおりにはいきません。やはり、それなりの勉強と素質がないとなかなか、言うはやすし行うはかたしということございまして、私の反省点であろうかなというふうに思っております。

私の考え方自体については、また後ほど述べたいというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君） 1番中島秀樹議員。

○1番（中島秀樹君） 今、失われた10年という言葉がございまして。ひょっとしたら、もう失われた20年になろうとしているのかもしれないけれども、やはり座して、黙って待っていれば、果報は寝て待てでは、これからは生き残っていけない時代だというふうに思っております。やはり、自分からアクションを起こしていかないといけないと思っております。

それと、成功体験というのは通用しないというふうに思っております。新しい価値、または、新しい勝ちパターンをつくっていかないと、これからはやっていけないというふうに思っております。それは自治体も同じことだと思います。市民の方は、この自治体が嫌だというふうに思えば引っ越してしまうということが、わりかし昔に比べたら多いというふうに思っております。極端に言うとうと、税金が高いから、安いところの自治体に住むとか、私は、そういった時代になっているかというふうに思っております。

そういった中で、朝倉市がどうやってこれから成長していくかという成長戦略というのが、私は必要ではないかというふうに思っております。ここで基本的といいますか、釈迦に説法になるかもしれないんですが、戦略とは何かということ、ちょっと調べてまいりました。

日本経済新聞社編集の経営学入門という本の中からとったんですが、戦略とは市場の中の組織としての活動の長期的な基本設計図である、というふうにあります。それともう一つは、戦略とは組織や事業の将来のあるべき姿とそこに至るまでの変革のシナリオを描いた設計図である、というふうに書いてあります。

済みません、読み上げてもわからないと思いますので、ちょっと画用紙に書

いてきたんですが、まず、市場の中の、要するに競争の中で物事というのは判断されるということになってます。先ほど言いましたように、競争に負ければ、住民はどんどんどんどん出ていきます。そして、人口が流出するというふうに思っております。そして、組織としての、済みません、今からキーワードを五つ申し上げます。組織としての、組織という人間集団を率いるための構想であると。人間のベクトルを合わせ、奮い立たせるものが戦略にはなければならぬ。市民の思い、それから、職員の思い、議員の思い、そういったものをまとめ上げるものが戦略にはないといけないということ。それから次に、活動という言葉があります。実行可能なアクションの構想である。私は、この水を育み街を潤す健康文化都市の創造というのは、そうではないかなというふうに、ちょっと疑っているんですけども、単なるかけ声、それから、スローガンは戦略ではないというふうにはうたっております。そこにアクションが伴わないと戦略ではないというふうには言っております。そして、長期的な、長期的な展望を与えようとするもの、10年後、20年後、30年後どうあるか、そういったものの長期的な展望が要る。そして、基本設計図、大きな構想を語って、こうしたいという意味、それから、構想を示すということ、これが私はこのスローガンのほうにあるというふうに思っておるんですね。それともう一つ、済みません、これがもう一回読み上げさせていただきます。戦略とは市場の中の組織としての活動の長期的な基本設計図である。

そして、もう一つ定義がされておりますのが、戦略とは組織や事業の将来のあるべき姿とそこに至るまでの変革のシナリオを書いた設計図である、というふうには書いております。あるべき姿という言葉と変革のシナリオというのが、この中ではキーワードなんですが、あるべき姿というのは目標ですね。こうあるべきだということ。そして、ここが私は足りないというふうに思うんですが、行われる変革の大筋、具体的な第一歩、一歩目をどういうふうに踏み出すか、その変革のシナリオ、これがセットになってないと、戦略というのは成り立たないというふうには書いております。そういった意味で、私はこの水を育み街を潤す健康文化都市の創造、これをスローガン、もしくは戦略とするのであれば、朝倉市は第一歩を踏み出さないといけないというふうに思っております。何か変革を起こさないといけないというふうに考えております。

そういった中で、朝倉市の戦略ということ、私はこれから考えていきたいと思っておりますが、その前に、朝倉市の発展を阻害しているものは何だろうかということ、ちょっと私質問の項目に挙げさせていただきました。私なりにも幾つか考えてきたんですが、先に執行部のほうの阻害要因として何を考えてあるか、教えていただけたらと思っております。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 先般から何年か前に、私が申しあげましたが、ぱっと、ある市に行きまして、わざわざそこに私は謝りに行ったことがございます。

我が朝倉市の一番の弱点は、246平方キロという広大な面積を所管しておりますだけに、それを経営していくのに非常にロスがある。狭いところに人口が密集しておれば、非常に効率がいい。それをいかにして広い土地を、今度は逆に利用したらどうか。ということになりますと、やはりそれなりの土地の利用、結局、言うなれば工場誘致等をもってやらにゃいかんというふうに考えられます。

人口が少なく、土地が広くて、老人が多い、こういう土地を制御していく、リーダーシップをとっていくためには、非常に難しい。だれがやったら難しい。最少の費用で最大の効果を上げられませんね。それで、限界集落がどんどんできてくる。そういうところに住んでおるだけに、我々はどのようにしてそれをやるのかということを考えました。

やっぱり、武田信玄が上杉謙信と川中島で戦いました。上杉謙信は春日山城から川中島に出てくるのは、武田信玄が躑躅ヶ崎の館からその戦場まで行くためには、3倍ぐらいの長さがある。どうしてもそこで時間的なロスがあって不利である。その不利を克服するためにどうしたらいいかということを経験が考えた。それが有名な棒道である。棒道をつくることによって、時間的な差を短縮した。

我が朝倉市はどうしたらいいか。今、朝倉市は甘木インターを持っておる、朝倉インターを持っておる、そして杷木インターを持っておる。この三つのインター、高速道路を棒道と考えたらどうかと。そして、時間的な差を縮めていく方策をとったらどうかということも、一つの方法であるというふうに考えております。

それから、小さいところに多くの人口がいないわけですから、広いところをやるためには、どうしても農業に頼らざるを得ない。旧甘木市時代、11カ町村が合併してできたんですが、そのときの市長は、基幹産業は農業である、農業であると言わんと、市長になれなかったんですね。どうしても農村人口のほうが多かった。甘木町だけでは勝てない。だから、農村に頼る。しかし、今農村がどれだけの徴税能力といいますか、納税能力があるのかということになると、非常に今問題があります。我々が学生時代、昭和33年ごろは、授業料が、私29年入学で2万円でした。今100万円ですね。50倍になっておる。そうすると、米1俵幾らになっておるか。その当時7、8,000円やったと思いますよ。今が

2万5,000円かそこらでしょう。3倍か5倍かしか、そのぐらいにしかなくなつらん。これじゃあ、農業は立っていきませんね。

農業が基幹産業だと言って、市長、何しよるかと怒られますが、農業だけでは税収が上がりにませんので、ここは工場誘致先進地でございます。キリン、BS、ロームというのがあります。ロームは今撤退しましたが、キリン、BS、そして明石工業とか村上開明堂とか、運送会社も来ておりますけれども、そういうふうな工場誘致をやらにゃいかん。金をここに集中させにゃいかん。ちょっとこれを言い出しますと長くなりますから、あなたのあれが減ると思いますので、また、中島議員の聞きたいところだけ、私が言いますので、このくらいにしておきます。

○議長（柴田裕隆君） 1番中島秀樹議員。

○1番（中島秀樹君） 市長の思いがよく伝わってまいりました。

今、市長のほうが、まず弱点といいますか、阻害要因として、非常に広いと、広大であると、そして、人口密度が低いために、非常に投資効率が悪い、もしくは効率性が悪いというお言葉がございました。二つ目にインターが三つありますけれども、これが活用されていないと、もしくはこの朝倉市内での移動がなかなか難しいという問題が言われました。それから、三つ目が農業のことがございました。なかなか農業だけでは朝倉市は成り立たないから、4番目としては企業誘致をやらないといけないというふうにおっしゃいました。

私も、実は同じようなことを考えておまして、まず一つは、朝倉市は広大で、福岡県の地図を見ましたら、朝倉市というのは、ちょうど真ん中ぐらいにあるんですけれども、福岡市を中心の地図を見ますと、やはり朝倉というのは遠いというふうに思います。そして、朝倉ってどこにあるのというのをよく聞かれます。秋月があるところですよと言えば、ああ、秋月なら行ったことがあるというような返事が返ってきて、やはり朝倉市というのはいま一つイメージがわいてないのかなあというふうに思っております。そういった意味で、朝倉市は明確なイメージがない。それが一つ弱点ではないかなあというふうに、私は思っています。

そして、やはり交通の便が悪い。なぜかインターが三つあるけれども、交通の便が悪い。軌道が2本通っているけれども、交通の便が悪い。ここら辺が、やはり交通インフラをいま一つ生かし切っていないのかなあというふうに思っております。

そして、農業につきましては、この総合計画を見ますと、朝倉市の経済見通しということで、平成17年でいきますと、農業の生産額というのは、全体のわずか5%弱です。それでは、本当に朝倉市の基幹産業というふうに言っている

けれども、本当に基幹産業なんだろうかというふうに思います。このままでいくと、農業は衰退していく一方で、ある意味見殺しにされようとしているのではないかなというふうに思っております。そういった意味では、ぜひとも私はてこ入れが必要だというふうに思っております。

そして、やはり働く場がない。だから、朝倉市には住めない。どうしても企業のそばに住んでしまうというような現象が起きてくるというふうに思っております。

そこで一つ一つ、私、市長にお尋ねしたいと思うんですが、では、交通の便の悪さ、私、そういった意味では、例えば甘木鉄道とか、以前質問しましたけれども、パーク・アンド・バスライドとか、そういった分を民間ともうちょっとタッグを組んで、もうちょっと便をよくするような動きというのをすべきではないかというふうに思うんですが、市長、この点はどのようにお考えでしょうか。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 何年か前に、中島議員がパーク・アンド・バスライド、私は今、ここで卒業していく私が、一つだけ言い残していききたい。それはこの市役所の庁舎が、もう三十数年たっておりまして、非常に老朽化しておる。この議場が特に老朽化しておりますね。もし、ここで直下型の震度5ぐらいでも、6以上になったら、もっと危険と思いますが、必ずこれはつぶれますね。ですから、合併特例債が合併して10年間ですから、もう4年たちましたので、ぜひこの庁舎は建てかえにやいかんというふうに思っております。一番の中樞部が死んでしまえば何にもなりませんのでね。

でございますが、それはどこにするのかということになりますと、やはり私は甘木インター周辺が一番いいのではないかなと。それが、今あなたが言われました、それで駐車場もですね、私は甘鉄の社長でありますから、甘鉄のことも考えてどうしようかなということ、延ばしてきとったんですが、やはりあのインター近辺につくるべきではないかなと、最近考えが変わってきております。

今、県庁に行きますのに、大体50分で行きますね。市町村会館、あそこの県庁の横に行きますのにですね。そうすると、インターの近所に市役所があれば、恐らく40分かからんで行くであろうと。そして、仮に杷木からおいでになる方も、高速を通ってくれば10分か15分で本庁に着くであろうというようなことも言えるわけでございます。今さっき申し上げました、信玄が棒道をつくったと。同時に、我々は広さを克服していくためには、高速道路を本当に活用せにやいかんのじゃないか。民主党が掲げておられました高速道路の無料化等々が、も



し実現をするならば、本当にあそこの辺に市庁舎を持っていけば、一挙両得でいいことができるのではないかというふうに思っております。

それから、農業問題については、また後ほどしゃべりたいと思いますから、どうぞ御質問いただきたいと思います。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員。

○1 番（中島秀樹君） 私はインターのそばに市庁舎を持ってくるというのを聞きまして、ちょっとびっくりしたんですけども、私は、市庁舎というのは、やはりまちの顔であり、核であるというふうに思っておりますので、歩いていける距離、町中にあるべきだというふうに考えております。ですから、高速のインターであれば、確かに早く外には出ていけるんですけども、利便性が悪いんじゃないかなというふうに思っております。これ、済みません、今回は市庁舎の場所がどこという問題ではありませんので、お話はここでちょっと打ち切らせていただきたいと思います。

農業につきましては、先ほど言いましたように、生産額でいきますと、朝倉のわずか5%弱で、けども、基幹産業というふうに言われております。それは確かに就業者が多いから、基幹産業と言わざるを得ないという部分もあるんですけども、本当に基幹産業なんのでしょうか。やはり、もう少しこ入れをして、育てていってあげないといけないんじゃないかなというふうに思っております。農業者の方というのは、つくるのは得意です。ただ、私は売るのが苦手だというふうに思っております。そういった意味では販路の開拓、もしくは製品の開発とか、そういった面について、市のほうがもっとリーダーシップをとるべきではないのでしょうか。もしくは農協と組んでやるとか、そういった意識を持った方と組んでやるとか、そういったことがもっともっと、これから必要じゃないのでしょうか。そうしないと、朝倉市の農業というのは見殺しにされてしまうんじゃないかというふうに思っております。これについて、いかがお考えか、お聞かせいただきたいと思います。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 我々が販売に参加していないということではないと思っております。と申しますのは、毎年正月、1月の月に東京の大田市場、それから、シティ市場ですね、それから、去年は大阪の大同青果、それから、京都青果等々にトップセールスマンとして行っております。我々は万能ネギが一番主体でございますけれども、そのほかにも志波柿ですね、それから、今度はとよみつひめというようなことで、市場調査も、マーケットリサーチもしてきております。

そういうことでやっておりますが、しかし、商売のことに行政が余り頭を突

っ込むことは、私はよしあしとっております。何でしてくれんのかというのは、きのうの矢野議員の質問の中で、市役所は何でもしてくれるところだというお考えが述べられました。市役所は何でもするところじゃないと、私は思っております。市役所ばかりに頼って、ごみは捨てる、ごみ捨て場をつくれと、市がごみ捨て場をつくらんやったら、不法に田んぼに捨てとるんだというような論法は、私は通らんとする。でございますので、やはりそれぞれが、コミュニティやらがどんどんやってくると、責任を持って、住民として、市民として責任を持って、何でもかんでも市役所へ持って行って、今度はホームレスが来た。市役所の職員は一生懸命やって、ホームレスの言うことを聞いて、福岡に連れて行った。ところが、置き去りにしたと。置き去りにしたとは言語道断ですよ。うちの職員は置き去りにするような不心得な職員はおらんと、私は信じております。職員を信じております。そういう職員はおりませんよ。一生懸命に世話をした。したけれども、結果的に目的がおかしかったというようなことであろうかなというふうに思っております。

今、言われましたことについては、また後ほどどんどんやりますので、どうぞひとつ、どんどんやってください。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員。

○1 番（中島秀樹君） 私は、市役所のほうに要求をするというのは、それだけ市役所が、まだ聞く耳を持っていると、頼るべき存在感があるからだというふうに思っております。これが頼られなくなれば、やはり問題だと思えますし、また、市民の声を聞くという、確かにですね、いろいろ私も座談会とかしますと、市民の方がおっしゃるのは、やはり要求が多いです。あれをつくってくれとか、これをしてくれとかですね。だけれども、一応話を聞くよという、そういうスタンスだけは、やはり僕は持つておくべきじゃないかなというふうに思っております。

そういった中で、朝倉の農業を、じゃあ、どうしていくかということで、私はこういうふうに考えております。朝倉は1市2町合併したわけですから、1市2町で、ある意味競わせたらどうでしょうか。旧甘木市の担当、旧朝倉町の担当、旧杷木町の担当という形で、担当者を置いて、何か一つヒット商品を出せとか、そういった形で、市の職員の方がリーダーシップをとって、二匹目のドジョウ、第二の万能ネギをねらうというのも、私はおもしろいんじゃないかなというふうに思っております。商売に口を出すのはどうかというふうに、市長はおっしゃいましたけれども、やはり口を出してあげないといけない時期だと、私は、今思っております。市長、どんなふうにお考えでしょう。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 私は大学を出まして、ずっと商売に従事して、社長歴30年、30人ぐらいの小さな会社でございますけれども、それでも、おやじからもらったときが5,000万円ぐらいの売上げでございます。私が卒業するときには30億円の売上げでございます。でございますが、今朝倉の農産物の売上げというのは、トータルで70億円ぐらいじゃないでしょうか。あなたは今5%と言われましたけれども、そんなものでしょうね。でございますので、もうちょっと売上げを上げにやいかん。そうすると、農家の所得が1軒当たり1,000万円ぐらいになるようにせにやいかんのじゃないかなと、そうせんと、専業農家としてやっていけないんじゃないかと。お嫁さんの来手もないというようなことじゃいけませんので、問題は、金がないといかん。銭こがないと、武田信玄が、いつも武田信玄を例に出しますが、あそこは甲州金が出ましたね。金が出たから、あそこはあのぐらいの山の中の狭い土地でも、二万数千人の動員ができた。だから、ここに何かもうかることをです、雇用の創出もそうですが、もうかること、結局売上げがどんと上がるようなものを持ってこんといかんのじゃないかと。だから、そうなってくると、例えば東京市場など行きますと、干し柿がたくさん出てます。これをやったらどうですかと、私は高木に行って、農家の方に言ったら、そんなものはされるものかと。所得の低いところが労働力をです、柿の皮をむいて、干して、シロコをふかして、そういうような、こっちのほうは豊かですよ。米麦である程度生活ができますのでね。

東北の米沢に行きますね。上杉鷹山公が、この前日向高鍋に行きました。鷹山公とはすばらしいですなと言ったら、あれは大したことはないとばいと。何でですかと聞いたら、非常に日向高鍋は貧しかったそうです。だから、貧乏になれておる。貧乏になれておるから、彼が養子に行ったら、上杉のほうは米どころですから。薩摩隼人が京都に志士で行ったときに、米の飯を食うたと、こんなうれしいことはないと言って感激したそうであります。そういう話が小説の中に出てきます。でございますから、日向高鍋は芋しかできん。それで、非常に貧しいところから行ったから、ああいうふうな改革ができたわけです。しかし、あれはです、また、本をずっと読み返しよったら、直江兼統のときにもう既にできておるんですね。120万石から30万石に減らされたときに、その土地を改良しながら、水路を引いて、石堤公園やらある、その石堤をつくってやって、大体50万石ぐらいまでは回復しとるんですね。だから、そのときにもコウゾとかカラムシとかというような特産物は直江兼統の農業白書の中に載っていますね。

ですから、やはりそういうことも、この朝倉市に取り入れて、農業に画期的な何かをつくって、そういうふうな外から入れる知恵を、市役所が持つことは

非常に大事である。ただ、農協という専門家がおられますのでね、農協を飛び越して、我々が指導するということは、ちょっとおこがましいんじゃないかと、プロじゃありませんのでね。その辺は十分に考えてやらにゃいかんというふうに思っております。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員。

○1 番（中島秀樹君） では、済みません、農業のほうはちょっと離れまして、次に、市長がおっしゃいました企業誘致のことについてお話ししたいと思っております。

私は、やはり朝倉市は働く場がどうしてもないというふうに思っております。働きたかったら、西鉄沿線とかに住むとかですね、どうしても働く場がもっとあったらいいなというふうに思っております。そういった意味では、私はこういうふうに考えているんですが、そういう職場に短時間で行けるような、そういった交通環境をつくれればいいというふうに考えております。ただ、逆に、企業を持ってくるというのも一つの考え方だというふうに思っておるんですね。そういった意味で、きのう四つの企業誘致に成功したというような執行部の方の答弁がございました。ただ、もうあと工業団地も一つしかあきがないような形になっております。こういった意味で、やはり企業誘致というのは、今非常に景気が悪いですから、すぐには企業というのは来ないと思うんですけども、やはり続けていくべきだというふうに思っております。やはりこつこつとやっついていかないと、誘致が成功しないというふうに思っております。そういった意味で、企業誘致の努力というのが、いま一つ、ちょっとおろそかに、最近なっているのではないかなというふうに思っておりますが、その点につきまして、いかがお考えか、お願いいたします。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 先般から、甘木市時代に麒麟、BS、ロームとっておりました。ロームが今閉鎖してますね。これは何でそげんだったかと。これは明らかに中国の影響ですね。大連のほうに行かれました。でございますので、やはりロームはいいところがあったら世話してほしいというような要望もあっております。ですから、県庁に行きまして、今中島副知事、ちょっと不都合ができておりますが、副知事のかわりも、まだできとらんようでございますので、また行って、お願いをしてこうかなというふうに思っておりました。

工場誘致する、昔、こういう話があるんですよ。先般から、私、例の有名な根本機材、根本塗料、持丸の塚本芳香議員の弟さんですけどね。非常に海外に3カ国ぐらい進出して、今、日本の企業のホープと言われております。そのの自宅に呼ばれまして、荻窪に行ってきたんです。昔、私が学生時代に、あそこ

は根本さん、それから、うちの高良係長、秘書課の、あれのおじさんになる高良、それから、具嶋の栄ちゃんといって、具嶋本家の御当主、ああいう方が荻窪に下宿してあった。あそこは下宿が多くてですね。私は遊びに行ったんですよ。そうしたら、大根畑で、荻窪あたりは本当に田舎だったんですよ。この間行きましたら、それはすごいですよ。わんさわんさ、押すな押すなでお客さんがですね。物すごく発展してますね。でありますから、やっぱりそういうふうには人口をふやすということは、自動車産業がでけんならば、何か違うものを持ってきて、飯の種をつくらにゃいかんというふうに思っております。

それで、今ひとつ、皆さんもですけれども、うちの市役所は率先してダイハツの車を買おうと。企業城下町じゃありませんが、明石工業はダイハツの部品をつくっておりますので、みんなでダイハツを買って、明石工業をどんどん太らせていこうというような気持ちも、非常に大事ではないかなというふうに思っております。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員。

○1 番（中島秀樹君） ビールは麒麟、タイヤはブリヂストンというふうに言いますけれども、今、私も初めて聞いたんですが、ダイハツの車を買おうと、これも明確なメッセージですので、私はいいと思います。ですから、そういった形で、ダイハツと一緒に朝倉市は成長していく、これも一つの戦略だというふうに思っておりますので、そういった一つの方向性も、麒麟とブリヂストンというのは、もう既にありますので、次の第3、第4のそういった企業を、私は育てていくべきではないかなというふうに思っております。

そして、私、阻害要因として、別に朝倉市の発展がおくれているのが市役所のせいだというふうには申し上げたくはないといえますか、そういうふうには思っていないんですけれども、ただ、一連のいろんな答弁とか、それから、いろんな物事の流れとかを見ていると、やはり市役所の方に足りないのはスピード感が足りないんじゃないかなあというふうに思っております。私は、民間の出身、経験がございますので、やはりスピード感が半分ぐらいといえますか、私たちの感覚でも倍ぐらいかかるのかなというふうに思っております。そういったスピード感というのは、人事交流とか、そういった分で身につけていく必要があるのではないかなというふうに思っております。

戦略が成功するためには、二つの条件が必要であるというふうに、先ほど紹介いたしました経営学入門という日経新聞社のゼミナールシリーズの本なんですけれども、それに書いてありました。

一つは、先ほど言いましたように、外向きの成功要件、それから、内向きの成功要件。外向きの成功要件というのは、環境の中に、自分のポジションがど

ういうふうにあるのかという位置づけをしているのか。今、市長といろいろやり取りをして、お話をさせていただきましたが、朝倉市の外づけのポジションというのは、大体見えてきたかというふうに思っております。

二つ目が内向きの成功要件、これは組織の行動や基本方針を実際に有効に実行できるだけの資源や能力を、組織が持っているかということです。そういった意味で、私が言いましたように、やはり幾ら立派な構想があっても、その実行部隊がしっかりしていないと、やっていけないということだと思います。そういった意味では、ちょっと生意気なことを言いますが、スピード感がいま一つ足りないのではないかなというふうに思っております。

それと、私がぜひとも必要だというふうに思ってますのは、前、一度これも一般質問で言わせていただいたんですが、ぜひとも人事評価システムを早く導入して、優秀な方が正当に評価される、客観的に、透明に評価されるシステム、こういったものが必要だというふうに、私は思っております。そしたら、優秀な人はどんどん働くとおっしゃるので、ぜひとも人事評価システムを早く入れていただきますようお願いしたいというふうに思っております。

市長、済みません、内向きの組織の能力、それから、人材ですね、これについてどのようにお考えか、お願いいたします。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） また、歴史の話ばかりして申しわけないんですが、指揮官、言うなれば御大将の能力の差によって、その軍団の力が全然違うわけですね。上杉謙信が何で強かったか。上杉軍団が何で強かったか。それは謙信が天才的なリーダーシップを持っておったからであろうかなと思う。それから、武田信玄が何で強かったか。これは謙信のところは米どころでございます。信玄のところは雑穀ですね。そばとか麦とか、そういうふうな山の中ですから。そういうふうなもので、大体軍隊が強いのは粗食に耐える、それから、民度が低い、そういうところのほうが強いんですね。それで、やっぱりリーダーがよければ、それはびりびりしてますから、市役所に置きかえても、市長が本当にやかましくて、頭がよくて、びりびりやれということであれば、それだけの能力を発揮するであろうというふうに思いますよ。私も30年の経験から、市役所に行ったら、おれがみんなうまいこと使ってやるよと言って、入ってきたんですよ。ところが、入ってきたら四面楚歌ですな。まあ、民間とは違いますのでね。私が一番苦労したのは、款項目がわからん。私はずっと商業学校や商学部を出ておりますので、複式簿記ならなんぼでもわかるわけですが、款項目をいちいちやる、わからんことはないばってん、せからしいですな。それから、組織のあれをもうちょっと勉強して、だから、市長になるのは議員を1期ぐらい

してからなったほうがいいんじゃないかなと。議員の皆さんに対する思いやりもあると思うんですよ。私みたいに初めからぼんと、上から市長になってくることは、今、よくなかったんじゃないかというふうに反省をしておりますが、肝心の話でございますけれども、やはりリーダーがしっかりと、若いときからの、そういう帳簿づけ等々についての経験があれば、もっとよかったんじゃないかなと。だから、筑前町の田頭君あたりが、ずっと職員から上がってきておりますから、それから、大阪の府知事とかですね、神奈川県知事ですか、そういう方々は30代、熊本県知事もそうですが、30代で県知事とか市長になられておりますけれども、そういう経験が若いときに職場におったならば、非常にいいんじゃないかなと。そして、なおかつあなたみたいに福銀、福銀が朝倉市の企業の中で、中から入ってみますと、非常にセキュリティーの問題等についても進んでますね。それから、1人1人の対応、1人1人の客に対する対応の仕方、頭の下げ方、何一つとっても福銀が一番すばらしいというふうに、私は思っております。中島議員はそこにおられたんですから、すばらしい教育を受けてありますので、今後ひとつ頑張ってください、この市役所の機運をひとつ変えていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○議長（柴田裕隆君） 1番中島秀樹議員。

○1番（中島秀樹君） そうしたら、済みません、時間も迫ってまいりましたので、私は、先ほど言いましたように、冒頭に申し上げましたように、やはり変化というのは、よりよい方向に私たちが変わっていくことだというふうに思っております。そのためには、先ほど言ったように成功体験にしがみついているのではなくて、私たちが新しい考えを柔軟に取り入れるとともに、才能ある人たちが、若いうちから活躍できる仕組みを整えることが必要だというふうに考えております。これは、市役所だけの人事登用とかではなく、朝倉市全体の人材の登用というのが、私は必要ではないかというふうに思っております。今NHKの大河ドラマで龍馬伝をやっておりますけれども、やはり、ああいう歴史が大きく動くときというのは、若い人がどんどん登用されて出てきて、優秀な人が表舞台に出てきたわけですから、そういった仕組みを、私は朝倉市も必要ではないかというふうに思っております。

そういった意味でよく、よそ者、若者、ばか者、女性というふうに言われまされども、そういった人たちが、朝倉市の中に声が届くような仕組みを、私はつくっていくべきではないかなというふうに思っております。外国人が日本に来て、組織の意思決定の場に同席すると、一様に驚き、こんな疑問を口にします。なぜこんなに年をとった人しかいないのか。しかも、どうして男性ばかりなのか。

私は、例えば朝倉市の区会長なんですけれども、多分今、全員男性だというふうに思っております。過去はいたということなんですけれども、女性は今1人もいないというふうに思っております。これは別に、男性にしてくださいとか言ったわけでもないし、地域の中からそれぞれ選ばれたわけですから、たまたまと言えば、たまたまなんでしょうけれども、やはり、形としては異常ではないかなというふうに思っております。

我々は知らないうちに前例とか、慣行とかに縛られているのではないのでしょうか。そういった意味では、そういう前例、慣行を破るために、ある程度の指針といいますか、新しい示唆というのが必要ではないかなというふうに思っております。これは各校区で区会長というのは、地区で選びますので、女性を全体で何%入れてくださいということはできませんけれども、でも、女性を区会長の中にも何人入れたほうがいいですよとか、そういった示唆というのには必要ではないでしょうか。女性の力というのを、これから活用していくのが、私は必要ではないかというふうに思っております。

市長、女性の市長が朝倉市にあらわれるのは何年後だというふうに思われますか。あらわれるというふうに思いますか。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 非常に、これは難しい質問ですね。区会長は、今なり手がありませんね。過去には、組長さんと区会長さんが、たしか開力の社長が、たしか八幡町の区会長になられたことがあったように記憶しておりますけれども、何人かしかありませんね。私も琴平町というところに住んでます。彼もそうですが、なかなか手がありません。それで、大体70代の人になってありますね。ですから、朝倉市の女性市長となると、あと10年じゃ難しいんじゃないでしょうかね。

やはり、私は市長というのは、志を持つとかにやいかんと思います。市長になりたいというのは、何をしたいからなりたい。私の夢は、例えば全山紅葉の山をつくろうというような志を持ってやらにやいかん。だから、私が出るときは下水道をやりたい。そのときは下水道の進捗率は3.2%でございました。だから、下水道をやらにやいかんと。そのために出るんだということで出ました。だから、今から先も市長、あるいは議員もそうであろうかなと思いますけれども、やはり自分の志というものを持って、そして、立候補して、だから自分を選んでほしいというふうなことでいったらいかがかなというふうに思っております。夢が一番大事であろうかなというふうに思います。

○議長（柴田裕隆君） 1番中島秀樹議員。

○1番（中島秀樹君） 今、世の中が複雑化しておりますので、私は、やはり



多様性というのを生かしていくべきだというふうに思っております。経済的な富裕化が一世代を超えて持続すると、全体の目標や大きな物語というのが失われるそうです。社会的な合意を取りつける必要のある課題が細分化していく傾向が出てくるそうです。そこでは、各論的な合意はあっても、国全体、社会全体としての斉一なモデルを適用できないし、単一の目標もなかなか設定できないというふうに言われております。そして、これだけ情報が複雑化しているという要因も加わって、意思決定や世代間の価値の伝達なんかもなかなか、今難しくなっている。これからそういう時代なんです。一枚岩でいこうとか、そういったのは、なかなか私は難しいと思っております。だから、そういった中で、多様な意見をいろいろ取り入れていく、そして、大きな理念でそれをくくる、それが私は必要ではないかなというふうに思っております。

きょう質問させていただきましたのは、朝倉市の将来の姿を明確に描いて、いろんな人の意見を取り入れながら、朝倉市がどういった方向に進んでいくべきかというのを、議会で明らかにできたらなというふうに思っております。私は議会人ですので、先ほど女性市長というふうに言いましたけれども、じゃあ、30代の女性の市議会議員が出てきたら、独身の女性の市議会議員が出てきたりしたら、これは朝倉市というのは変わったなあ、すごいなあというふうに思います。やはり、どうしてもまだ男性社会といいますか、朝倉市は22名のうちに5名、女性の市議会議員がいらっしゃいますので、そういった意味では開かれた議会だというふうには思っているんですが、そういったふうに活力といいますか、そういったものが必要だというふうに思っております。若い人の声、女性の声というのを市政に反映させるような、そういった仕組みというのが、私は必要ではないかなというふうに思っております。そういった意味では、市長はなかなか行きづらいと思います。あれだけ行って、要求ばかりされるんだったら、行くのは嫌だというふうに思うんですが、これは市長と語ろう室とか、出前講座とかなんですけれども、済みません、正式な名前はわからないんですが、市長と語ろうとかいう分のことを申し上げたいんですが、なかなか行きづらいというふうに思うんですが、でも、私は市長は、先ほど言いましたように、いろいろ要求はあっても、話を聞きますよという、そういうスタンスだけは持っていないといけないというふうに思っております。

もう市長はあと少しの任期になりましたけれども、住民の声を聞くという点について、どういうふうにお考えか、お聞かせいただけたらと思っております。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（塚本勝人君） 非常にいい意見だと思います。私は行ってから話を聞きたいと、何回も申し上げても、受け付けてくれないところもございます。じ

やあ、情報公開で封書で出していいですかと言ったら、それもいかんと、反対すると。大体民主主義であろうかなと。私は情報を、行政が公開することは義務とっております。ですから、当然それはやるべきとっておりますが、それに反対を受けるということは、私はおかしいというふうに思っておりますが、もう時間もありませんので、住民投票条例も大体出したかったですけれども、次の市長が解決をしていただくとありますが、残念です。あと何日かしかありませんので、本当に残念に思っております。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員。

○1 番（中島秀樹君） きょうは非常に漠然とした質問をさせていただいたんですけれども、私は、もう一度言います。鮮やかな朝倉市の未来像というのを、みんなで描いて、それを共有すべきだというふうに考えております。そして、成功体験を捨てて、やはり変革をしていかないと、朝倉市というのは変わっていけないというふうに思っております。そういった意味では、強い思いを持てば、だれもがチェンジメーカーになれるというふうに思っております。

これで、私の一般質問を終わらせていただきます。

○議長（柴田裕隆君） 1 番中島秀樹議員の質問は終わりました。

10分間休憩いたします。

午前10時56分休憩